

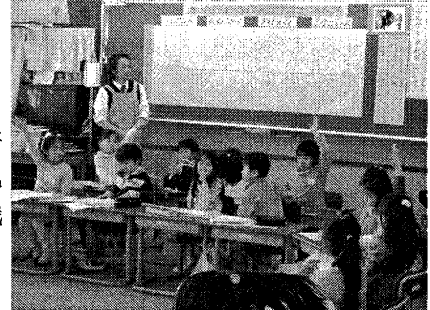
特別活動

友達と響き合い、自ら進んで実践できる子供の育成

～互いの考えや思いを分かり合い、生活をよりよくしようとする意欲を持てる活動の構想～

子供たちが互いの考えや思いを分かり合えるようにするとともに、学校生活を自らの手でよりよくしようとする意欲を持つことは、子供同士が響き合い、自ら進んで様々な活動を実践していく上でとても大切であると考えます。そこで、研究1年次は、子供たちが互いに考えや思いを出し合い、聴き合い、出し合った意見を学級の総意にしていく話し合いの工夫と、課題意識や目的意識を持ち、自ら活動する意欲を高める方策を研究してきました。

(特別活動主任 野中 智則)



1 研究の経緯と本年度の方向

特別活動部では、平成16年度から18年度までの3年間、「人とかかわりの中で、喜びを共有する子供の育成」という研究主題のもと研究を重ねた。その結果、人とかかわりにおいて、自分らしさを発揮し、集団の中で活動の喜びが味わえるようになるとともに、自発的、自治的な取り組みが見られるようになった。その反面、集団としての課題意識や目的意識が足りない面が見られた。

一方、社会に目を向けると、「集団の中で自分の思いを伝えられない」「共に活動することが苦手である」など、対人関係がうまくつけない子供が見られる。このような現状を踏まえると、実践的な集団活動を通して、子供たちの個性とともに、豊かな人間性や社会性を伸ばしていく必要があると考えられる。

特別活動部では、上記の内容と全体提案「次代を担う子供たちへ」から、子供たちの10年後、20年後の姿を「社会性を持ち、自ら進んで人や社会とかかわっている姿」とした。そして、このような次代を担う子供の姿に迫るためには、同じ教室、同じ学校にいる友達同士がかかわり合い、心と心を響き合わせて生活しながら「自分たちの学級や学校は自分たちの手で創る」という思いを持って、自発的、自治的に活動することが重要であると考えた。そこで、目指す子供像を、

- 互いの考えや思いを分かり合い、高め合える子供（集団の中で）
- よりよい生活を目指し、自ら進んで活動に取り組める子供（個人として）

と設定し、研究主題を「友達と響き合い、自ら進んで実践できる子供の育成」とした。

研究1年次である本年度、このような子供を育てていくためには、互いの考えや思いを理解しながら、生活への意欲を持つことが大切であると考え、全体提案副主題「互いに高め合い響き合う授業の構想」とのつながりも考え、研究副主題を「互いの考えや思いを分かり合い、生活をよりよくしようとする意欲を持てる活動の構想」とした。授業において、互いの考えや思いが分かり合うようになるには、自分の考えや思いを友達に伝えたり友達の考えや思いをよく聴いたりするとともに、出し合った意見を理解し合って学級の総意にしていくことが大切である。また、今の生活をより充実させ向上させるためには、「自分の学級や学校生活をよりよいものにしたい」という意欲を持って自発的、自治的な活動に取り組めるようにする必要があると考えた。そこで、これらのことから、本年度は、研究内容を次の(1)、(2)として位置付け、授業の実践を通して研究を進めていくこととした。

- (1) 互いの考えや思いを出し合い、聴き合い、学級の総意にしていく話し合いの工夫
 - ア 一人一人が持つ考えや思いを出し合い、聴き合うための手立て
 - イ 出し合った考えや思いを学級の総意にしていく集団決定の在り方
- (2) 課題意識や目的意識を持ち、自ら活動する意欲を高める学級活動の工夫
 - ア 子供たちの気付く目や感じる心を生かした「活動テーマ」や活動づくり
 - イ 活動のねらいや目的の明確化

2 研究の内容

(1) 互いの考えや思いを出し合い、聴き合い、学級の総意にしていく話し合いの工夫

話し合いの場において、子供たちが互いに考えや思いを出し合い、聴き合うには、自分の考えや思いを進んで述べたり、表出された友達の考えや思いをしっかりと聴き合ったりすることが大切であり、このことは、子供たちの相互理解の根本になると考えた。そこで、子供たちが互いに考えや思いを分かり合えるように、一人一人の考えや思いを出し合い、聴き合う手立てを考えることにした。また、このことから、話し合いの場を出し合った意見を学級の総意にしていくには、出し合った意見から友達の考えや思いを理解し、一致する点を見いだし集団決定していくことが大切であるといえる。そこで、このような話し合いができるように、集団決定の在り方を考えていくことにした。

ア 一人一人が持つ考えや思いを出し合い、聴き合うための手立て

子供たち一人一人が持つ考えや思いを出し合い、本当に聴き合えるようにするためには、一人一人が自分の考えや思いを事前に明確にしてから話し合いに参加し、「自分の考えや思いを述べよう」「友達の意見をしっかりと聴こう」という意識を持たせることが大切であると考えた。そして、そのために次のような手立てを考えた。

- ・ 学級活動ノートの「話し合いについての考え」の欄に、「理由」の項目を新たに設け、事前の全体会において、自分の考えや思い、その理由を記述させてから話し合いの場に参加するようにする。事中の話し合いでは、一人一人の考えとその理由を、教師の助言をもとに司会グループが事前に記入しておいた座席表や名簿を活用して、意図的指名をしたり挙手を促したりしながら、多くの子供の考えや思いが出し合えるようにする。
- ・ 本校の特別活動での目標を示した「めざす4つの子」の具体的な子供の姿をもとに、子供の発達段階に即して、「意見を出し合う視点と聴き合う視点」（表1）を作成した。それをもとにして、「友だちの考えや思いを分かり合う話し合いのポイント」（表2）を示した。そこで、意見の出し方や聴き方を説明するようにする。話し合いの場では、友達の意見をよく聴いてハンドサインで自分の意思を明確に示すとともに、賛成や付け足し、反対の意見を述べたり、質問をしたりするように促す。これを授業において繰り返していくようにする。
- ・ 子供たちが事前に自分の考えや思いを書いておいたカードを学級全体に示しながら、意見を発表するようにしたり、小グループで話し合ったり近くの座席の友達と意見交換をしたりする時間を設けるようにする。

表1【意見を出し合う視点と聴き合う視点】

学 年	意見を出し合う視点	意見を聴き合う視点
低学年	<ul style="list-style-type: none"> ・ 理由を明らかにしながら自分の意見を発表する。 ・ 自分の意見を進んで発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 友達の意見に耳を傾けてじっくり聴く。 ・ ハンドサインで賛成の意思を示す。 ・ ハンドサインをもとに相互指名を行う。 ・ 拍手をして、賛成の意思を示す。
中学年	<ul style="list-style-type: none"> ・ 友達の意見と自分の意見の相違を考えながら意見を述べる。 ・ 進んで賛成や付け足しの意見を述べる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 友達の意見と自分の意見を比べながら聴く。 ・ 友達の意見をよく聴き、ハンドサインで賛成や付け足しの意思を示す。
高学年	<ul style="list-style-type: none"> ・ 友達の思いを受け止め、よりよい方法を考えながら意見を述べる。 ・ 進んで賛成や付け足しの意見を述べたり質問をしたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 友達の意見に対して、友達の持っている思いを受け止めながら聴く。 ・ 友達の意見をよく聴き、ハンドサインで賛成や付け足し、質問の意思を示す。

表2【友だちの考えや思いを分かり合う話し合いのポイント例】

友だちの考えや思いを分かり合う話し合いのポイント（高学年）	
《意見を出し合おう！》	《話をきき合おう！》
・ 友だちの思いを受け止め、よりよい方法を考えながら意見を述べよう！	・ 友だちの持っている思いを受け止めながらきこう！
・ 積極的に賛成やつけたしの意見を述べたり、質問をしたりしよう！	・ 友だちの意見をよくきき、賛成やつけたし、質問のハンドサインを出そう！

このような手立てを積み重ねることで、友達の思いを受け止めて聴いたり、友達の意見を自分の考えや思いと比べながら聴いたり、それに対する自分の意見を述べたりすることができるようになり、子供たちが互いに分かり合えるようになると考える。

【実践例①：多様な考えや思いを出し合うための工夫（1年生）】

「転校した〇〇さんに応援ビデオをつくろう！」という活動テーマで話し合いを行った。その中で、「自分が転校したら」ということを意識させたり、事前に家庭で保護者と考えてくる活動を設定したりして、自分が考えてきたアイデアを大きな文字やイラストで画用紙にかく活動を取り入れた。このことで、子供たちは多様な考えや思いを持ち、友達に分かりやすく伝えることができた。また、ハンドサインを活用したり子供たちが相互に指名し合う形で話し合いを進めたりしたことで、互いの意思を明確に示すとともに多くの意見を出し合うことができた。

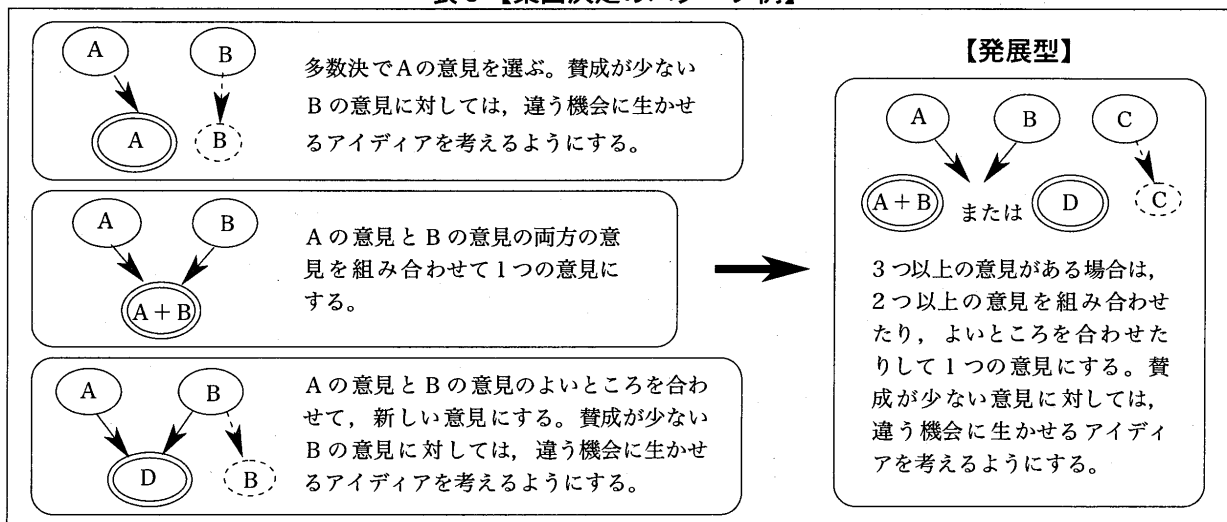


イ 出し合った考えや思いを学級の総意にしていく集団決定の在り方

特別活動での話し合いにおいて、子供たちが集団決定していくことは、相互理解から実践につなげていく上で重要なことである。その際、子供たちが、互いの気持ちを伝え合い、理解しながら、出し合った考えや思いを調整し、集団決定していくことで、互いの心と心につながりが生まれ、次の活動への意欲が高まると考える。さらに、多数意見だけでなく少数意見のよさも大切に扱っていくことで、少数意見の子供たちも気持ちよく協力できるようになり、その後の活動に意欲を持って取り組めるようにする。

そこで、表3のような集団決定のパターン例を作成した。そして、そのパターン例を参考にしながら、互いの気持ちを理解し、出し合った意見を集団決定していくようにする。少数意見については、司会グループや教師が話し合いに応じて、他の意見と組み合わせたり、他の場面で生かせるようなアイデアを発表させたり、教師がその意見のよさを賞賛したりすることで、自分の意見が学級の総意とならなかった子供も決まったことに対して気持ちよく協力できるようにする。これらの活動を積み重ねていくことで、子供たちは集団決定の仕方を身に付け、安易な多数決に頼らず、話し合いによって学級の総意にしていくことができるようになる。

表3 【集団決定のパターン例】



(2) 課題意識や目的意識を持ち、自ら活動する意欲を高める学級活動の工夫

子供たちがよりよい生活をしようという思いを持って学校生活を過ごしていくには、問題点に気づき解決していこうとする課題意識や何のために取り組むのかという目的意識を持つことが重要である。そして、そのためには、学級や学校で起きた諸問題に気付く目や自分たちのよさを感じる心を持って様々な活動に取り組んでいくことが必要となるだろう。そこで、子供たちが課題意識や目的意識を持ち、自ら活動する意欲を高めるには、子供たちの諸問題に気付く目やよさを感じる心を生かした「活動テーマ」の設定や活動づくり、さらに活動のねらいの明確化を行い、学級活動を進めていくことが大切ではないかと考えた。

ア 子供たちの気付く目や感じる心を生かした「活動テーマ」の設定や活動づくり

子供たちの気付く目や自分たちのよさを感じる心を生かすには、常日頃から「自分たちの学級や学校の生活をよりよくしたい」という意識を持たせながら、学級や学校生活を送ることが大切であると考えます。そのためには、学級や友達のよさを伝え合ったり、アンケート調査などを行って意図的に子供たちの課題意識や目的意識を喚起したりすることが必要である。その上で、「活動テーマ」や活動内容を考えて、話し合い活動や集会活動、係活動を行うようにする。

例えば、話し合い活動や集会活動では、教師とともに、計画委員が学級全体から学級や学校で起きている諸問題を取り上げたり、目標達成に向けて方策を募ったり、実態調査や各種記録の結果を活用したりする。また、係活動では、それぞれの係の取り組みのよさや改善点について、帰りの会で発表し合ったり、学級活動コーナーや背面黒板を活用して伝え合ったりして、「もっと〇〇しよう」という思いをふくらませるようにする。そして、これらの活動を繰り返すことで、自らの生活をよりよくしようとする意欲を高めることができる。

【実践例②：子供たちの気付く目や感じる心を生かした「活動テーマ」の設定（４年生）】

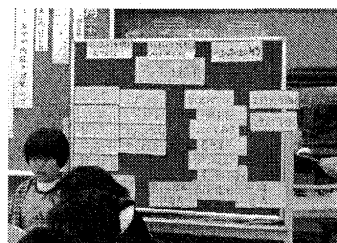
子供たちの気付く目を生かした「活動テーマ」が設定できるように、「よりよいクラスにするために」というアンケートをとった。子供たちは、学級の生活の様子を振り返りながら、学級で起きている諸問題や学級や友達関係をよりよくしていくための視点を記述していた。そして、計画委員と教師が相談しながらテーマを絞り、今回は、「いつも同じ人とばかり遊んでいて、みんなで遊ぶことが少ない。」「よいクラスにするには、みんなが協力することが大切だと思う。」というアンケートの結果から、「チームワークがよいクラスにするために」という活動テーマを設定した。

イ 活動のねらいや目的の明確化

活動のねらいや目的は、「活動テーマ」について話し合ったり集会活動や係活動を企画したりする際のよりどころであり、活動の方向性を決める重要なものである。活動のねらいや目的が明確になるほど、子供たちの課題意識や目的意識も高まるので、その後の活動がより活発により意欲的になる。その際、活動のねらいを学級全体に示したり活動の目的を話し合ったりすることで、子供たちが共通理解できるようになり、学級全体の活動意欲が高まるようにする。具体的には、計画委員や提案者は、「活動テーマ」や学級全員の思いをもとに、事前に教師とともに活動のねらいを設定したり、事中において議題決定までの流れを掲示物で示したり、活動のねらいをキーワードやキーセンテンスで学級全体に明示したりするようにする。また、話し合い活動においては、事中に「何のために行うの?」「どんな集会にするの?」といった活動のねらいや目的を再度確認してから、活動の内容について話し合うようにする。これらの手立てをとることで、子供たちは課題意識や目的意識が明確になり、その後の活動を自分たちで考えて実践していこうという意欲を高めることができると考えた。

【実践例③：キーセンテンスを活用した話し合い活動（６年生）】

「思い出づくり集会の内容を決めよう」という「活動テーマ」から、「６年２組の１年間を振り返り、クラス一人一人のよさが生きて一生の思い出に残るような『思い出づくり集会』の内容を決めよう」という「活動のねらい」を設定した。そして、「活動のねらい」を「１年間を振り返る」「クラス一人一人のよさが生きる」「一生の思い出に残る」という３つのキーセンテンスに分けて黒板に提示しながら話し



合いを進めていった結果、子供たちから出てきた様々な意見の中から、それらのキーセンテンスを視点にして、「思い出づくり集会」にふさわしい内容を自分たちの手で考えることができた。

3 成果と課題

子供一人一人が自分の考えや思いを出し合い、聴き合い、出し合った意見を学級の総意にしていくな話し合い活動を工夫したり、課題意識や目的意識を持ち、自ら活動する意欲を高めていくための手立てを考えたりしていくことで、子供たちは、友達同士で分かり合えるようになるとともに、生活をよりよくしようとする意識が出てきた。今後は、活動の振り返りを生かしながら、これまで以上に学級や学校生活の充実と向上を目指そうという意識が持てるように支援していきたい。